

新しい生活常識27 食事・通勤・性生活・風呂  
距離より「しゃべらない」 | 星野 源

# AERA

'20.7.6 No.31

増大号 アエラ

特別定価 430円

音楽家・俳優・文筆家

星野 源



〔巻頭特集〕

## 新しい生活様式を アップデート

昭和63年6月10日創刊31周年記念号  
毎月27日発行（6月27日発売）通巻1807号  
2020年7月6日発行

新学習指導要領に合わせ教材も作り直さなくてはならない。自宅学習でペースが乱れてしまった子のために、個別の補助教材も作ってあげたい。

だが、朝6時半から夜9時半まで働いても、感染対策の雑事に追われ、とても時間が足りない。女性を含め校内のほとんどの教員が土日も出勤している。「仕事量は倍増しました。終わりが見えないし、もはやどこまで耐えられるかという感じ。でも一番つらいのは、自分が納得できていないことを児童に指導しなくてはならないことです」

海外からの帰国児童に「校庭で遊ぶのにマスクの意味ある？」と聞かれ、答に窮した。「先生もそう思う。でも、どんな時もマスク」が暗黙の了解で、みんな従うのが日本なんだよね」合理性より同調圧力。それを仕方のないことだと説明する自分に矛盾を感じた。



「レジデンシャル百合ヶ丘」で面会中の70代の夫婦。夫は毎日のように訪れ、施設内の交流スペースでマッサージや屋外の散歩をして30分間を過ごす

よう予約制で時間をずらすなど対策して、面会を実施している。施設長の高橋好美さんは言う。「手洗いやうがいなど、基本的な感染症予防策を徹底し、施設内にウイルスを持ち込みさえしなければ、いたずらに恐れることはないと考えています」

その上で、基本的な介護を専門職が引き受け、「家族と同居者との絆は断たないようにする」のが施設の役割だと話す。「それを強制的に『切って』しまふのは、過剰対応だと思いません。家族に会えないのはあまりにむごい。面会の権利まで奪うべきではない」

教室には十分な余裕もあるのに、分散登校を続ける。

「しかも子どもたちには、『しゃべるな、くつつくな』と指導しろと。子どもたちはいじらしく、タツチしない鬼ごっこや、ボールを投げたフリ、当たったフリをするエアドッジボールなどをしています。私は感染のリスクより、子どもたちのストレスのほうが気になります」

2メートル以上の距離を取り、マスクをしているので、互いの声が届き取りにくい。新指導要領の目玉は「主体的・対話的な深い学び」のはずなのに、対話は禁止。黙って教師の話の聞く一斉授業に逆戻りした。朝の会で一曲歌うだけで子どもたちは気持ち晴れやかなるのに、歌は禁止。マスクをしていれば、歌ってもいいのではないかと、日々悶々とする。

### 見直す必要がある

静岡県公立高校勤務の女性教師(52)はそう嘆く。これまでは2人1組で行っていたが、グループワークが禁止された。1人ずつ実験するには器具が足りない。「教師がやるのを見せるしかないのですが、密になるので集まってはダメだと。それでは後ろの生徒は実験の手元が見えません。スマホで撮影した映像をプロジェクターにつないで見せていますが、こんなことをいつまで続けるんでしょう」

現実の学校生活に「新しい生活様式」の何をどこまで取り入

# 介護の質を諦めない

## 感染対策との間で揺れる現場

緊急事態宣言解除後も、介護施設での面会は「緊急の場合を除き、一時中止」とされている。重症化リスクの高い高齢者を前に、現場も家族も揺れている。

「もう3カ月、父に会えていません。ここまでする必要があるのでしょうか」

兵庫県神戸市に住む女性(57)は嘆いた。今年2月から父親(87)が市内の介護老人保健施設に入居している。父親は軽度の認知症がある。週に1度は面会に訪れていたが、新型コロナウイルスの感染拡大により、3月

半ばから面会禁止になったままだ。女性は「新しい生活様式」とソーシャルディスタンスの必要性も、頭では理解している。「でも、会わない時間は、認知症が進んでいく時間でもありません。親子の間ではなんとか成立していた会話が、次に会った時でもできるだろうか。気が気ではないし、納得いきません」

### 面会する権利を守る

神奈川県特別養護老人ホーム、レジデンシャル百合ヶ丘は、緊急事態宣言解除後は、面会場所を別途設ける、密にならない

の鉄則はむやみに「受診」「検査」「入院」をしないこと。病院に搬送され、人工呼吸器などを装着することになったら、穏やかな最期を迎えたいという希望が叶えられなくなってしまう。だからこそ揺らぐべきではないのですが、現場はすごく悩む」

### その人らしさを重視

現場の負担は悩みだけではない。感染対策で介護職員の負担自体が増えている。AERAが行ったアンケートには、「マスクしながらの入浴介助が、暑さ」と息苦しさで一番つらい」との介護職員の声も寄せられた。

高口さんは介護の本質は「一人ひとりの違う人生と生活を守る」ことにあり、「二度に」「全部」「完璧に」を求めないことだという。求めれば無理が生じ、目的を見失いやすくなる。入浴介助でのマスク着用も一例だ。「無理をすれば、感染予防の前に職員が倒れてしまいます。そもそも入浴中はあまり話をしません。脱衣室で『おばあちゃん、下着ですよ』『服着せませすよ』と声をかけなければならぬ。これもありますが、そのときにマスクをつけなければいけません」

させなければいけない。食事介助も横並びは無理なんです。飲み込んでいけるかをよく確認して食べてもらわないと、誤嚥の危険があります」

「私も施設内ではマスクをつけません。施設内にウイルスを持ち込まず、きれいな状態を保つていけば、マスクはいらないはずですから」

高橋さんは、「新しい生活様式」に気をとられ、ケアが無味乾燥になってしまうのでは、介護のあるべき姿を否定することになると言う。「大切なのはその人の人らしさ、個性性を重視したケアです。3密を気にしていたら、介護は成立しません。車椅子からベッドへの移乗介助も体を密着